



Link+

都市の未来に想いを馳せる

杉本博司氏 × 大林組設計部(伊藤翔/村田真悟/北村知里)

都市を取り巻く環境は、めまぐるしく変化を続けている。
未来は想像不能になっている一方で、
都市の未来を担うのはアーキテクトたちである。
ニューヨークと東京を拠点に活躍する現代美術家 杉本博司氏を迎え、
都市の未来について、想いを語り合う。

杉本博司（すぎもと・ひろし）氏

1948年東京生まれ。立教大学卒業後、1970年に渡米、1974年よりニューヨーク在住。徹底的にコンセプトを練り上げ、精緻な技術によって表現される銀塩写真作品は世界中の美術館に収蔵されている。近年は執筆、演劇、設計へも活動の幅を広げ、2008年建築設計事務所「新素材研究所」を建築家 榎田倫之と設立。2009年公益財団法人小田原文化財団を設立。2017年に構想から10年の歳月をかけ建設された文化施設「小田原文化財団 江之浦測候所」を小田原市江之浦に開所。主な著書に「空間感」(マガジンハウス)、「苔のむすまで」「現な像」「アート起源」(新潮社)、「趣味と芸術 謎の割烹 味占郷」(ハースト婦人画報社)。1988年毎日芸術賞、2001年ハッセルブラッド国際写真賞、2009年高松宮殿下記念世界文化賞、2010年秋の紫綬褒章、2013年フランス芸術文化勲章オフィシエ、2014年第一回イサム・ノグチ賞、2017年文化功労者等、受賞・受勲多数。

大林組設計部

写真右上 / 本社プロジェクト設計部 伊藤翔
写真右中 / 名古屋支店建築設計部 村田真悟
写真右下 / 広島支店建築設計部 北村知里



Link+

全世界的に都市が均一化している。 どこを見たってみんな鉄骨建てて締めて終わり。

伊藤翔(以下:伊藤) 杉本さんは海外を拠点にご活躍されていますが、様々な都市の、それぞれの個性、魅力をどう感じていらっしゃるのかを伺いたと思います。海外ではニューヨークに住まわれていますが、どのような経緯だったのでしょうか。

杉本博司(以下:杉本) そうですね、住もうと思って住んだわけじゃなくて、22歳のときにふらっと海外に行ってから、そのまま帰るきっかけを失っちゃったっていうのが事実なんです(笑)。22〜25歳までの3年間はカリフォルニアに住んでたんですけど、25歳のときにニューヨークに、まあ、学校も終わったので。ニューヨークに出てみたら、現代美術に出会っちゃってですね。それで写真を使って現代美術をやっとうと意図的に決めて…。ニューヨークと東京に軸足を置くバランスっていうのは、その年によって全然違うんですけど、今年はバリのヴェルサイユ展が決まってる、バりにいたことも多かったですね。テルアビブでも大規模な回顧展がありましたし、国内(熱海)ではMOA美術館の改装もやって、「じゃあついでに展覧会もやれよ」ということでそれもやりましたし…。まあそういう感じで、毎年毎年いろいろな都市にいますね。

都市の未来に想いを馳せる

村田真悟(以下:村田) 私は少年時代にアメリカとドイツで育ち、そのあと東京都、東京、名古屋と、様々な都市を転々としています、日本の都市の固有性や独自性とは何だろうかと考えてしまいます。

杉本 京都には僕が骨董屋を始めたときから年に4回くらい行くんですよ。30代後半でしたから、その頃から比べるとずいぶん変わったと思うね。人は来てるけど…来ない方がいいんじゃないかな、きっと。本当に良いものが消えてくという感じがな。東京の場合は、とにかく建築ラッシュだね…。だって大手町なんかパッと見るとマンハッタンかな?と思うような光景になってきてるよね。だから全世界的に都市が均一化していると。どこを見たってみんな鉄骨建てて締めて終わり、みたいな。昔みたいに一つ一つに個性があるっていうのじゃなくて、コストを考えるともう「これしかない」っていう、超高層の作り方が画一化されている。これはニューヨークも一緒に、チェルシーに住んでるんだけど、やっぱり巨大な開発が行われていて。60階だか90階だかが10棟くらいいっぺんに建っているんだよね。みんな同じ。耐震基準が緩いからか、こんなんでもいいの?っていうのもあって…(笑) それは、ニューヨークだけではなくて、シンガポールも上海もみんな同じようになってる。文化の違いがなくて均一化された、ほんとにインターナショナルスタイルっていうのかな、作り方にムダがなくなっちゃって。都市はどんどん均一化して、つまんなくなっていると思う。

都市の未来に想いを馳せる



Link+

村田 建築物だけでなく、人の暮らし方、衣食住遊働も同じように均質化されつつあるのでしょうか?

杉本 東京なんかでも、やっぱり長く続いていたおじちゃんおばちゃんがやってくるようなラーメン屋さんとかが全部排除されてるからね。みんなチェーン展開するような店に変わって……。銀座なんかほとんどそういうことになって。上海でもそうらしいけれども、個人単位で成り立ってた小さな商店、飲食店がなくなって、みんなマニュアル化されたチェーン店に……。それはそれで手軽だし、美味しくていいのだけれども、人間がいなくなるっていう、ね。そのうち全部ロボット化され、カードを差し込むと食事が出てくるような都市になっていくんじゃないかなと思うわけ。人と人が出会わなくていいような都市に…。

空き家を壊して、庭にするとかね。そういう法整備をしていかないと。
この均質化に飽き始めた人たちが出てきた今だからこそ、ね。

北村知里(以下:北村) 私は大阪で築90年の長屋に住んでいたことがありますが、改修して住んでもいいということだったので、それこそ漆喰を塗ったり…いろいろと手を加えました。そこで暮らしていると、同じような興味や関心を持った人の

コミュニティに参加するようになり、新しい人との出会いが生まれてきました。人々の意識の中でも、均質化したものにちょっと飽きてしまって、町屋とか長屋に、私のように文化や出会いを感じて、改めて興味を持つ人が増えてきているのかなって気はしますね。

杉本 そうだね。例えば、国の問題として人口減少が大問題だなんて言ってるけど、僕は人口減少は当たり前だと思ってるのね。だって、この拡大再生産の資本主義で年間5%の成長だとか言うけれど、成長ということは、森の木を切ること、自然を壊すっていうことになるんだよ。それを人間の住むように変えていくわけだから。今でも都会で空き家がいっぱい出てきてるじゃない。今後、人口減少が進んでいけば、もう家を建てる必要がないんじゃないかな。空き家をもう一回活用した方が、いい生活ができるんじゃないかと。だから、都市のせいにする前に、近い未来を想像しながら人間の生産の仕組みみたいなものを大枠で考えていかないと袋小路になっちゃう。一つの視点からでは行き詰まっちゃうわけ。昔の一人当たりの住居面積はもっと広がったよね。庭付きの家に住めてたんだけど、今そういう状況じゃなくなったじゃない。これからは空き家があった場合、その隣の家を買った人はその空き家を壊して、自分の庭にできるとかね。そういう法整備をしていかないと。この均質化に飽き始めている人たちが出てきた今だからこそ、ね。

都市に恋して - Link+



写真左上 / 杉本氏作品
写真左下 / 杉本氏コレクション
写真中 / 杉本氏アトリエ内床石
写真右 / 対談風景

Link+

森を切らずに成長を抑えるという基本的なコンセプトは、自然とどうやって共生していくのかという日本人の血が持っている感性とシナジーを生み、これからの世界を共振させていくことなんだと思う。

伊藤 私はドイツの設計事務所へ2年間出向して働いたことがあるのですが、そのときの海外の同僚たちの方が、光や風といった自然を感じたいという欲求が強いことにショックを受けました。ブラインドや窓を閉め切った空間で過ごすのが当たり前になってきている私たちは、日本人が本来持ち合わせているはずの光や風、自然に対する感受性を失いつつあるように感じます。

北村 杉本さんも、いろんなメディアで「越境する文化」という言葉を発信しているらしいです。あえて平たく言えば、私たちは日本的感性を取り戻さなきゃいけない、というメッセージだと思っています。ただ、正直なところ、若い人は特にだと思いますが、あまり具体的に感じる事がなくて…。

杉本 日本の中にいると気が付かないよね。日本人がどれくらい変わってるかということについて、わざわざ自分から考えてみようという機会もないから。いったん海外に出ると気が付くだけだね。私はアメリカに22歳からいるおかげで、みんなに「なにそれ？」って聞かれる。答えに窮しちゃうわけで、それで急いで鈴木大拙とか読みあさって。日本文化については20代の頃から意識

するようになってたかな。あとヨーロッパやアメリカの人たちは、日本の縄文時代の一万年を、新石器時代から文明化しなかった、というようにネガティブに捉えているところがあって。頭が悪かったから文明化できなかったんだろうと思われてたけど、日本人は頭も良くても感性も鋭いから、意図的に文明化を避けていたと僕は思ってるのね。要するに、こんなに豊かな自然に囲まれたところに住んでいると、栗はある柿もある、狩猟採集をやっていたら生活できるっていう。海に入れば魚がいるし、入江には貝があるし、こんなところ世界中には少ないわけだね。すると、自然とのコミュニケーションをどうするかということを真剣に考えるようになるし、ひいてはそこに神々がいると自然に思えるようになった。だから神々に感謝の祈りを捧げ、来年の収穫を保証してもらうために、自然とのコミュニケーション技術が圧倒的に高まっていく。

コミュニケーションに必要なから、色の名前一つとっても日本には何百何千つであるでしょ。基本的に西洋には七つしかないから。同じように風の名前にしても、空気の乾いた状況の名前にしても、とにかくたくさんある。そうして言語能力やコミュニケーション能力が高まってきた。森を切るなんてことはとんでもない崇りがあると。文明化すれば、耕地ができて畑が作れるけれども、そんなことをしたらバチが当たるという感性があるから、壊さずに調和の中で一緒に生きていくという共生の能力を身に付けた。だから日本の技術というのは細かい。

西洋とはスタンダードなこまやかさが違う。それは自然のこまやかさに対する気配りがあるから、日本人の感性として、そうになっている。だからこそ、森を切らずに成長を抑えるという基本的なコンセプトは、自然とどうやって共生していくのかという日本人の血が持っている感性とシナジーを生み、これからの世界を共振させていくことなんだと思う。

伊藤 日本人の感性を大切に、ですね。本当にそうありたいと思います。

僕のやっていることは、石工に普通通りの仕事をさせてあげること。日本の職人技術が途絶えちゃうのは忍びない。

村田 以前、別のメディアで、「ジャンルを超えた文化的アーキテクトという役割を明確にし、日本人の感性や技術をかたちとしてしっかりと設計できる人材を育成していかなきゃいけない」という杉本さんの言葉を拝見しました。この文化的アーキテクトにはどんな役割、能力、意識が必要で、どのような職能を持っている人が必要だとお考えですか？

杉本 例えば石工とか左官の職人にしても、昔はいっぱいいたのよ。今はプレハブ工法になってしまって、要するに職人技術がなくても外国人労働者を雇

Link+

って安く働かせてどんどん作っていくこと。それは由々しき事態だね。僕がやっていることは、石工に普通通りの仕事をさせてあげること。近代以前までに行われていた日本の職人技術が途絶えちゃうのは忍びない。いろんな石の積み方とか様式をやっていたら、仕事がないと、その技術がどんどんなくなっちゃうからね。文化的意識とか、こういったものを今の時代にも伝えていくことが、行き詰まりが見えている生産の仕組みというものになにか、一つ石を投げられるんじゃないかと僕は思うね。僕は晩年になってしまったから、あとはみなさん若い世代にお任せしますね(笑)。

北村 確かに日本では、日常の中で職人技術に触れたり感じたりする機会はなくなってきていますね。一方で、ヨーロッパでは、材料を長く使って、昔ながらの技術を継承し続ける文化が残っているように感じます…。

杉本 ヨーロッパの旧市街っていうのは中世から石造りでできちゃってるからね。だから歴史が断絶されていない。今とずっとつながってるの。パリなんか、ちょっと郊外に行くともう建物があるけど。タワー・ド・モンパルナスなんてのは唯一の汚点だけだね(笑)。エッフェル塔だって最初は猛烈な批判で、万博が終わったら壊すことになっていた。それが意外と馴染んで、今も残ってるけど(笑)。



Link+

**逆に今は屋台のラーメン屋さんみたいな、
場末のそういうところがあると入ってみたいなる。
おしゃれに飽きちゃった(笑)。**

北村 ちょっと都市の歴史の話が出ましたので、未来の都市についてもお話を伺いたいと思います。10年前は多分思いもなかったことですが、現在は都市の中で人間よりもスマホと接する時間が多くなってきていて、これからは生まれながらにコンピュータに接しているジェネレーションが中心になっていくでしょう。人が変わるなら、その中で都市もどのように変わっていくのかを伺いたいです。

杉本 一極集中はもう必要なくなってくるよね。過疎化した地方に、どんどん戻っていく方がいいんじゃないかな。僕も最近はほとんどバリでのミーティングとかニューヨークでのミーティングで、飛行機で10時間もかけて行きたくないという感じになっている。なるべくコンピュータを使ってやるようになった。だから旅行する必要もなくなってくるんじゃないかっていうね。そのうち3Dミーティングみたいに、ここにスッとバーチャルな人が出てきて、ミーティングとかは、もうほんとに5年後くらいにできるんじゃない?そうすると都会にいて、常にこうして会う必要っていうのがなくなってくる。やっぱりどこか自然の中に出て行って、午前中は畑を耕して、午後は仕事のミーティングに出るとかの方がいいんじゃないかな。

北村 そうなると東京の姿も変わっていきそうですね。

杉本 そう。だから空き家率が増えて、また平屋に戻っていくと。超高層の50階建みたいなものは次の大地震が来たときに機能的にダメになる。エレベータが止まったら終わりだからね。超高層から廃墟化していくって時代が今度来るんじゃないかな。

村田 そういう時代でも、やっぱり訪れたい場所というのが、存在していて欲しいなと、個人的には思うんですね。都市の様相は均質化していく中でも、私たち設計者の思考が均質化しないようにしなければならないと思います。もともと日本人が大事にしていたものを振り返って学び、私たちが持ち合わせているはずの日本の感性を呼び起こして、創作につなげていくこと。それが個人のアイデンティティになって、建物にも反映されていく。長く残っていくことができれば、都市の個性にもなっていくと信じたいですね…。

杉本 まあ、僕は基本的に悲観論者だから(笑)。だから世界の終わりがどういう姿かっていうのを、展覧会でも写真を使ってやったし。たとえば昔、おしゃれなカフェがなかった頃はそういうのも素晴らしいけど、今はおしゃれなカフェなんてどこにでもたくさんあるわけで。逆に今は屋台のラーメン屋さんみたいな、場末のそういうところがあると入ってみたいなる。おしゃれに飽きちゃった(笑)。



写真上 / 杉本氏スタジオ
写真左下 / 杉本氏作業デスク
写真右下 / 杉本氏書斎

Link+

**今の若い人たちは明るい未来なんて信じられないでしょ？
都市が縮小化していくことをネガティブに捉えずに、
都市と世界の未来を考えて欲しいなと思っています。**

伊藤 均質化していく中で、アイデンティティなり、違っていくのをどうとこ
ろに見出せるかという、やはり時間の中で自然に生み出されてくるもの、だと思
うんです。デザイナーが意図して作ったおしゃれなものが違いを生み出すのでは
なく、時間を経て使われ続けて、風化したりに生まれてくるものにこそ個性や愛
着を感じます。

杉本 だから人間くささなんでしょうね。新建材が劣化していくあの嫌な感じて
いうのもあるんだけど、それさえも面白いような…。

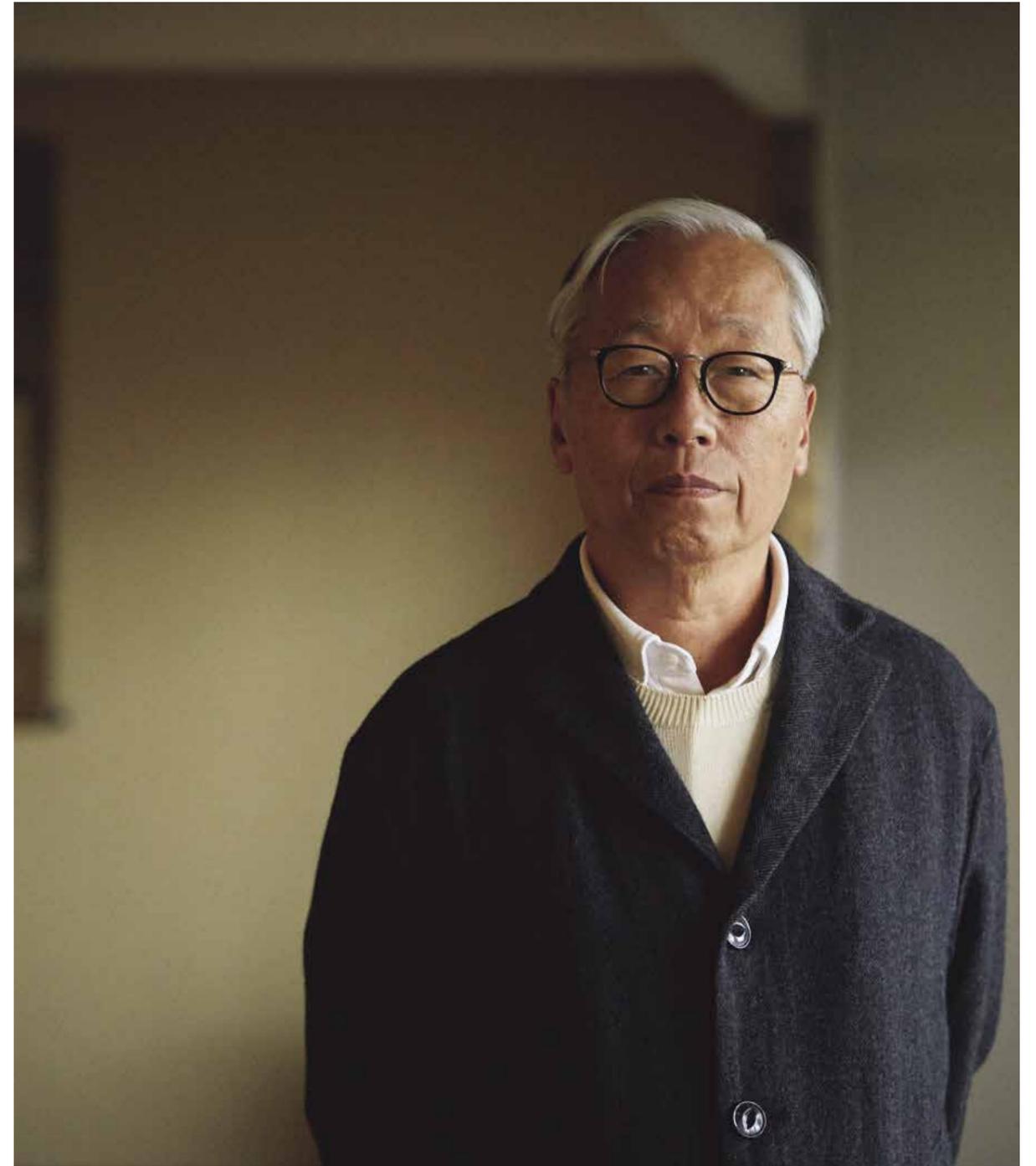
伊藤 杉本さん自身は悲観論者だとおっしゃいますが、建築活動においては、
一つ一つの素材を吟味して愛でるとともに、その空間の未来を想い描いて楽し
んでいるように感じます。私たちは、都市の未来をコントロールすることはできな
いというネガティブな感情を抱く一方で、目の前の建築に思いを入れて作り続
ける、それらの集合が都市の明るい未来につながるというポジティブな感情も
芽生えた気がします。そんなアンビバレントな感情を胸に抱きながら、アーキテ
クトとしてもを作り続けるためには、やはり明るい未来を描きながら創作を続け

たいと思うのですが。

杉本 僕が若い頃なら、シンプルに明るい未来を信じることができた。今の若
い人たちは明るい未来なんて信じられないでしょ？(笑)戦争は起こりそうだし、
大地震は来そうだし。それが一回終わった後に、残った世界にも何らかの役割
が出てくるかもしれないけど。平家物語の最後みたいに、「見るべきほどのこ
とは見つ」ってことで、人間が減っていくという、滅びの美学は日本の文学に通
奏低音としてあるのね。廃墟を愛でる、荒城の月みたいな、ああいう感じは悪くな
いと思うんだよね。都市が縮小化していく、それは美学的にも捉え方があるんじ
ゃないかな。

伊藤 縮小し衰退する都市の未来も、ネガティブに捉えることはない。

杉本 目先の10年、20年じゃなく、人類の歴史全体をもう一回考え直す大風
呂敷を広げて、これからの世界がどうなるべきかを考えることが重要だと。都市計
画ってというのはその後に来るもんじゃないかと思うな。個々の建物はその後
なので。自己矛盾に陥りつつある文明そのものを、哲学者とか経済学者と一緒
に建築家も考えなくちゃいけない。そういう都市と世界の未来を、みなさんには
考えて欲しいなと思っていますね。



2018年12月13日 都内アトリエにて